

Pradīpoddyotana 第七章を中心とした

Candrakīrti の注釈傾向について

横山裕明

Candrakīrti 著作 Pradīpoddyotana-tīkā (以下 PU.) 第七章は、菩提獲得の方法・五仏と五境・各種憶念の方法といった後期密教の核心部分が説かれる Guhyasamāja-tantra (以下 GS.) 第七章の注釈をしている重要な章である。ここでは、PU. 第七章に引用されている經典および PU. に見られる特殊な文法用法を明らかにすることによって、Candrakīrti の注釈の傾向を考察する。

まず、引用經典の確認によって未発見經典の Skt. を 12 偈と Tib. を 2 偈回収することができた。それぞれ文中での經典の名称は異なるが、確認されたのは以下の 4 つの經典からの引用である。

- Sandhivyākaraṇa-nāma-tantra. (以下 SV.)
デルゲ版 (以下 D.) No. 444. 北京版 (以下 P.) No. 83.
- Śrī-sarvabuddhasamayogaḍākinijālasaṃbara-nāma-tantra.
(以下 DS.) D. No. 366. P. No. 8.
- Śrī-vajramālābhīdhānamahāyogatantra-sarvatāntrahr̥daya-
-rahasyavibhaṅga-nāma. (VM.) D. No. 445. P. No. 84.
- Vajroṣṇīṣa-tantra. (Skt. および Tib. 未発見經典)

これらの經典の中でも特に SV. は PU. 第七章に引用されている 12 偈中の 9 偈を占めており、Candrakīrti が特に重要視した經典であることが分かる。この中の SV. と VM. は GS. の釋タントラであり、Candrakīrti の GS. 理解の礎となっていると考えられる。また、PU. の Tib. D. 57a3, P. 66b5-6 に見られる DS. から引用されている偈について、唯一存在する PU. の版本はこれが偈であることにすら気付いていない。今回、写本研究によってこれを偈と認識した上で引用箇所を確認し、Skt. の回収もできた。さらに、この直後の偈は Indrabhūti 作の Jñānasiddhi にも引用されていることが先行研究で示されている。父タントラである GS. の注釈において母タントラである DS. の偈を引用していることは Candrakīrti の思想を強く反映しているといえる。

次に、PU. に見られる特殊な文法用法について考察する。PU. 第七章には iti prāpte という表現が随所に見

受けられる。しかし、ここで注釈文献での特別な読み方として使われていると考えられる。pravāp には「獲得」といった意味の他に “L. M. Sukla *A Dictionary of Sanskrit Grammar.*” p. 278. l. 24 によれば prāpti- には ‘application of a rule’ という意味がある。また、“M. Monier-Williams *Sanskrit-English dictionary*” p. 707 ll. 6-8 によれば prāpta- には ‘obtained or following from a rule.’ という意味があり、その直後に iti prāpte の意味が ‘while this follows from a preceding rule.’ と書かれている。すなわち「先行する規則に従った場合」というような意味がある。PU. における iti prāpte の用法で共通することは GS. 本文に出てくる単語 (以下 X) とそれと同様の単語の性・数・格が異なっている形 (以下 X’) が iti prāpte の近くに位置していることである。このことから、iti prāpte は X と X’ の関係を現すために用いられたと推測でき、各用例を比較研究した結果「(X が X’) であるのが [文法] 規則に従った場合における [形である]」という著者の主張を導き出すことができる。また、続いて āṛṣaṃ という単語を共に使用する場面が多く見られる。“M. Monier-Williams *Sanskrit-English dictionary*” p. 152 ll. 80-81 によれば āṛṣaṃ には「ṛṣi に関する」という意味の他に ‘the speech of a ṛṣi the holy text’ という意味がある。すなわち、聖なる言葉や聖典といったものを指す場合に āṛṣaṃ が使われる。

以上のように、Candrakīrti は iti prāpte を用いて文法規則に従った場合における正しい形を示しながらも GS. を指し示すのに āṛṣaṃ という単語を用いて聖典としての GS. の権威を主張している。つまり、これは決して GS. 本偈の文法的な誤りの指摘ではない。それでは、なぜ聖典を尊重しながら文法規則における正しい形として解釈を示す必要があったのか。以下に可能性が高いと考えられる 2 つの仮説を提示したい。

仮説 1 元々 Sanskrit とは異なる言語 (例えば Prakrit) で書かれていた GS. を Sanskrit 化する過程で各語の本来意味する格の変化では metre に合わなくなった。したがって、metre に合わせるためには本来の

文意と異なる格変化をせざるを得ず、異なる意味に読めるようになってしまった。または意味が通じなくなっていた。そこで、Candrakīrti は伝承に基づいた意味での正しい形を PU. で示した。

仮説2 多少の文法上の問題があるにせよ GS. 本偈の格は伝承されている写本の形で読まれていた。しかし、Candrakīrti が受け継いだ GS. の実践または Candrakīrti 自身の手による GS. の実践の意義付けと GS. 本偈の内容に整合性がとれなくなっていたため、GS. 本偈の読み方を無理にでも弟子たちに伝えようとした。そのため半ば強引にでも Candrakīrti が求める文意を基にした場合の文法規則における正しい形を PU. で示した。すなわち、GS. 本偈の形を意味の上で解釈し直して文法的に正しい形として示した。

上記のどちらの仮説にしても聖典をどのように解釈すべきか、という Candrakīrti の懸命な姿勢が窺える。以上、PU. 第七章に引用されている経典および PU. に見られる特殊な文法用法を明らかにすることによって Candrakīrti の註釈の傾向を考察した。

註

- 1) C. Chakravarti : Guhyasamājantrapradīpodyotanāṭikāśaṭkoṭivṛyākhyā, Patna, 1984.
- 2) Sāṅkṛtyāyana. 112. The Pradīpodyotana-ṭīkā, photograph of Sanskrit MS. belonging to the Jayaswal Institute, Patna. なお、本研究ではその写真版を使用した。
- 3) 高橋 尚夫 : Jñānasiddhi 第 15 章一和訳一 : 『豊山教学大会紀要』 5
(大学院仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻)